Titibu1151
平成２４年4月号 秩父１１５号　ｐ１

渡満記（雄基奉天組）①
最後の決死敢闘演習

吉原　瑞穂
予科7-7
航空１１－２
（東京広尾）

著者吉原瑞穂の雄基奉天組の渡満記は平成２年２月「秩父」２７号に掲載されている。当時の「秩父」は矢野宏治㉔手書きの版下を渡辺孝一⑦が印刷して出版していた。一方、６０期航空１次の渡満記はプロの作家岸見勇美著「紅顔海を渡る」が原書房より平成１３年８月１０日に出版されている。この書には渡満組の再編第１梯団、第２梯団の行動が克明に記載されている。しかしその内容を裏付け補足するものとして体験者自身が書いた手記は極めて貴重であると思い敢えて２０数年前の記事を復刻した。しかしこの手記は非常に長いので、４～５回に分けて「秩父」誌上に掲載する予定。（編集子）

目次

１．分科決定の頃
２．渡満の旅
　―修武台から舞鶴での触雷まで―
３．再度渡満の旅
　―海防艦で日本海を渡る―
４．山間の夜行軍―雄基から会寧まで―
５．貨物列車の旅
　―会寧から奉天へそして帰国―

１．分科決定の頃

“吉原候補生は次男坊だったナァ！、貴様なら良い戦闘機乗りになれる。しっかりやれ”菊池誠区隊長（５６期）から短いながらジーンとくる激励の言葉を頂いて教室をでる。渡り廊下の傍では、今を盛りの百日紅が、薄く陰った７月半ばの太陽に、その葉先を震わせていた。

当時、我々航空士官学校第１１中隊（飛龍隊）の候補生は秩父山中の「荒川小学校」に“疎開”していた。昭和２０年に入って、艦載機による空襲も頻繁になったため、教科進度維持のために採られた処置であったのであろう。深い緑と渓谷に囲まれた山里の朝夕は殊の外涼しかった。暇を見つけては荒川の清流で泳いだり魚を捕ったり、夜は空襲の心配も無くぐっすり眠ったりと、ささやかな開放感を味わいながらも、日課は修武台のままに急を告げる戦勢の要求に応えるべく只管精進していた。

この時も航空士官学校恒例の、いわゆる“決死敢闘演習”が山岳地帯を利用して行なわれていた。筆者は重機関銃分隊員となり、千歳貞彦㉖、晋 哲哉⑪、時田（大河原）重成㉕等と９２式重機関銃を整備しての演習であった。

三峯神社まで重機関銃を担ぎ上げ、神社に参拝（この時頂いたお守りは今も大事に持っている）した後、“分解搬送駆け足”下山、引き続く急行軍に次ぐ急行軍の後、薄暮に到って最寄りの森林内に露営（携帯天幕も使用しない正真正銘の野宿）することとなった。

一秒でも早く一分でも長い睡眠をとろうと“落葉の寝床”に入ったが“決死敢闘演習”特有の空腹（当時の定量は俗称馬糞パンという小形のパン１個、水は水筒一杯）と藪蚊の来襲で寝付きを邪魔される。暗い森の中では誰が何処に居るのかも分からない。近くには話し相手も居らず、寝つかれ

ぬまま梢の僅かな隙間から訪れたたった一つの星を今宵の友とする。どれ程の時間が経ったか、それでも少しは眠っていたらしい耳に演習終了のラッパ号音、次いで、“候補生は直ちに〇〇神社に集まれ！”と小声で触れ回っている声が入ってきた。“落葉の寝床”は畳む必要はない。抜け出すとすぐ装具をつけて示された神社の境内に急いだ。“演習を中止し宿舎（荒川小学校）に帰る”ことになったらしい。各区隊毎の人員点呼が終わると直ちに出発。

“何事が起こったのだろう？”だが、夜間行動中の私語は慎まなければならない。皆が押し黙って夜半の山道を急ぐ。

途中､荒川渓谷に架かる吊り橋にかかる。細いワイヤーで吊り下げた橋が中天に浮いて対岸の闇に溶け込んでいる。狭い横板が隙間を開けて並べられ遙かな谷底から微かに渓流のささやきが聞こえる。区隊長の統制で一人ずつ渡る。夜の暗さが幸いしてさほどの恐怖も覚えずに渡り終える。全員無事に宿舎に帰り着いた時は夜が明けていた。

小休止、次いで朝食の後、修武台への帰校準備を急ぐこととなった。この作業の間に菊池区隊長から候補生一人一人が面接の上、激励の言葉を掛けて頂いた。操縦訓練に入るため第１梯団に編入されて満州に渡ることになった。

区隊長とた我々とは､戦勢の赴くところ､この別れが“今生の別れ”になるかもしれない。“兄貴の温もり”を味わいながら部屋に帰り、筆者の帰校準備も済ませてくれていた大峰（椎原）道夫㉔、千歳、晋と校庭に出る。彼らも戦闘機である。千歳とは小学校、中学校そして修武台までもずっと共にきた仲だったが、これからもまた一緒である。東洋一の規模と海軍切っての精鋭を誇る“鹿屋海軍航空隊”の近くに生まれ、爆音を子守歌にして育ち、昼夜を分かたず行われた猛訓練を頭上に見ながら遊び戯れた筆者にとって戦闘機のパイロットになるのが生涯の夢であった。遂に長年の夢が適えられた。満州での操縦訓練への期待で膨らんだ胸は方言丸出しの夢語りを際限のないものにした。お陰で点呼に遅れ、厳しい切磋を受ける羽目になった。修武台には翌日帰り着いた。

§渡満の旅

ー修武台から舞鶴での触雷までー

修武台に帰ってからは渡満準備に追われた。各人１個のりんご箱（当時は木製）に教程類、日用品等を詰め込み、所定の場所に集積、一方で、軍装の返納と交換が行なわれた。銃剣は竹鞘の物に替え別に軍刀が支給された。十数ロの束の中から２尺３寸程の手頃なのを一口選び出した。軍刀用の帯革は無いので荷造り用の細引きを利用して、佐々木小次郎もどきに背負うことにする。水筒は孟宗竹を節を付けて輪切りにし、飲み口にコルクの栓をつけ、細い紐で肩に吊すようになっている。遅れて行った筆者には直径１５ｃｍ、長さ３０ｃｍ程の特大のものが一つ残されていた。選びようも無くそれを受領し、今まで使ってきたアルマイト製のものを返納した。小振りで上品なものを持って喜んでいる者、ひょろ長いのを持って腰に差して、その着眼の良さを自慢する者、士官候補生とはいえ、まだ少年の気が抜け切っていない連中のこと、それぞれが茶目なアイデアを披露しては次の作業に掛かっていく。小銃、銃剣、背嚢、天幕の他、冬服、外套、雨衣もすべて返納した。

こうして出来上がった渡満組、即ち“第１梯団”の士官候補生のいでたちは、フェルトの山高帽を庇だけ残して切ったものに顎紐を付けた軍帽、竹鞘の銃剣、孟宗竹の水筒（これは太、細、長、短一つとして等

しいものは無い)、僅かばかりの日用品を入れた背負袋、細引き紐で背負った軍刀、僅かな米を詰めた雑嚢というものであった。慌ただしかった渡満準備も遅滞なく終わり、地上組との分かれもそこそこに修武台を後にした。昭和２０年７月２５日であった。

品川駅に向かう電車から度重なる空襲の後を見るにつけ、この仇は必ずとってやるぞと意気込む純真な士官候補生達であった。候補生達の乗った客車の後方に、ユングマン練習機を４０数機積んだ貨物を連結した列車で西下した。途中で何回かの空襲警報を聞いたものの直接空襲を受けることなく無事に舞鶴に着いた。当日夜は、舞鶴の女学校の講堂に宿泊し、翌２７日朝から帝立丸に乗船し荷物と貨物の搭載を開始した。

船の乗組員が足らず、起重機を動かす船員は配置されていないとのこと、候補生１人当たりりんご箱１個の荷物の他、枠に入れられたユングマン練習機４０数機を船倉に積み込むのも候補生がやることになった。１万数千トンの貨客船の船倉は何層かに区切られ、各層の床板（正しい名称は知らない）を全部取り外すと船倉は目くらむほどに深い。海面からハッチのある上甲板までも、これまた余りにも高い、ユングマンを積んだハシケが小さく見える。

先ず、大峰（だったと記憶する）が起重機の操作に挑戦する。初めてとのことなかなか思うようにはいかない。ハシケまでフックを降ろすのに手間取る。フックが軽くて振れるのだ。少し重くした方が良さそうだ。結局誰かがフックにぶら下がって降りることとし、体の小さな筆者が先ず降りることになった。足をフックに掛け直径２cm程度のワイヤーにすがりついて降りる。甲板から離れるには一度高く引き上げられるので、その時の海面からの高さは優に２０mは越えそう。その上に素人が操縦する起重機の動きはぎこちなく、右に左に大きく揺れて船の腹に打ち付けられそうになる度に肝を冷やしながらもなんとかハシケに降り立った。

ユングマンを梱包した木枠のロープにフックを掛けデッキに合図する。引き上げられる荷物は振り子のように振れながらなんとかデッキまで上がっていった。　船倉に降ろすのもまた一苦労であろう。ハシケのオッチャン達が仕事にならんとぼやく声には、全士官候補生を代表して我慢する。それでも１機、１機とハシケから引き上げては船倉に降ろしている中に、さすがは戦闘機のパイロット要員だけあってコツを覚えるのは早い。次第にスピードも上がり、オッチャン達から怒鳴られることもなくなった。慣れぬ作業ながら珍しさもあって愉快な気分の中に、大きな失敗も無く積み込みを終わり、ハッチを閉めて防水用のカバーを掛けロープで縛着し終わったのは午後も早い時刻だった。心地良い疲れは夕食時限まで許された午睡によってすっかり癒された。

出航を明朝に控えた船上での夕食はいつものとおり少ない食事ではあったが、内地での最後の食事という感傷もなく、他愛もない語らいのうちに楽しく済ませた。食事が終わればすることもなく、早目の消灯（といってももともと灯は点いていないが）となった。灯火管制の厳しい軍港の夜は真っ暗であった。そよ風の吹く甲板での快適な眠りは長くは続かなかった。吠え狂う船尾の高角砲に目を覚まされた。Ｂ２９が手が届くほどの低空をゆっくり過ぎてゆく。海面に水飛沫が上がる。乗組員の水兵に聞くと、機雷を投下しているとのことである。我々の船を挟んで出口と入口を塞ぐように投下しているようだ。各地の対空火器が激しく射撃するが敵機は悠然と飛び去ってい

った。幸いにも我々の船が直接狙われることもなかったので台風一過したあとの静けさに戻るのは早く、翌朝、まぶしく照らす朝日に起こされるまでぐっすり寝込んだ。

７月２８日０６：３０出航の予定は“掃海作業終了次第出来るだけ早く”と変更された。数隻の掃海艇が湾内から湾口まで自らの危険をおかしながら午後遅くまでかけて掃海作業を行った。それを甲板から見ていることしか出来ない我々であった。帝立丸は夕食を済ませた頃抜錨した。大峰、千歳と後甲板に出て後にする内地への“決別の儀式”を済ませる。甲板に尻を降ろし船足に従って湾内を眺めると、あちこちの山陰に樹木や竹で偽装した艦艇が係留してある。巡洋艦が只１隻、我々の左舷をかすめて追い越していった。御紋章が寂しく見えたのは駆逐艦も連れない孤独の出航のせいだろうか。遠ざかって行く舞鶴の町並みそして夕闇の迫る山陰の山並みを眺めているうちに誰からともなく歌い出した。

ああ堂々の輸送船　さらば祖国よ栄えあれ　遙かに拝む宮城の　空に誓ったこの決意…

生まれて初めての船旅、然し念願が適った“戦闘操縦”への旅立ちに興奮した３人は声を限りに歌い続けた。

やがて船は湾口を過ぎいよいよ外洋に出ようとしていた。“ドドーン”突然、デッキにおろした尻が突き上げられた。

“機雷だ！”乗組員が慌しく駆け抜けて行った。船は右へ急旋回して間近の海岸に向き直った。“カッター　降ろせ！”

水兵の一人がカッターに飛び乗りゆっくりと下がり始めた。不幸はその時起こった。カッターがぐらっと横に揺れるとロープを操っていた水兵がバランスを崩して海中に落ちていった。そこは機雷で穴が開いた船倉へ流れ込む海水が渦を巻いていた。その後の必死の捜索にもかかわらず遂に遺体は見つからなかったという。すでに機関も停止した船は船尾の方から沈みながら惰力で海岸に向かっている。やがて何かに掴まらないと立っていられなくなった。後甲板まで海水が被ってきた。

“ゴーン！”船が何かに突き当った。幸運にも海中に隠れた岩と岩の間に船首が挟まったらしい。これで沈没だけは免れた。タラップから降ろされ、まず婦人・子供（満州へ疎開のために乗船していた）からカッターに移り、海岸の岩場まで運ばれていった。

僅かな数のカッターながら乗組員達の懸命な努力によって全員が無事救助された。候補生も一人の事故もなく救出された。適当な広さと傾斜をもった岩を探して野宿することとなった。夜露に打たれながら一夜を明かし、夜が明けてからは遮るものもない７月の炎天に容赦なく照りつけられながら、勿論、給食給水もなく、生米をかじりながらの約２０時間の“戦闘”であった。

船は船尾から半分近くほどが波に覆われ、船首を空に向けて突き上げている。あたかも狼の群れに腰から下を押さえ込まれて前足だけで逃げようとする“ヘラジカ”のようである。４０数機の練習機も、教程類を入れたりんご箱も全て沈んでしまった。文字通り着のみ着のままになった。

翌２９日朝、海軍の作業船が大型（候補生全員が一挙に乗って尚余裕があった）のハシケを横に抱えて救出に来た。“之の字”の行進を繰り返しながら昨夕３０分程で走った距離を４時間近くかけて岸壁に辿り着いた。我々が上陸すると入れ替わりに、第２陣がハシケに乗り移り、沖の貨物船に向かって行った。知り合いの候補生と声を掛け合う間もない呆気ない擦れ違いであった。再び舞鶴女学校に戻ってここに宿泊した。

翌３０日朝早く艦載機の爆音で目を覚ま

した。第２陣が乗船した船が機銃掃射を受けている。魚を狙うカモメの群れのように入れ交わり立ち替わり攻撃している。第２陣の船だけが狙われているようだ。何人かの戦死者が出たと後で聞くことになった。この朝の第２陣に対する艦載機の機銃掃射は乱舞するグラマンと為す術もなく大きな体を横たえていた船との一方的な“戦いにならない戦い”であった。

船が沈み練習機も私物品も総て失った我々は次の船の手配が出来るまでの間、福知山の長田野廠舎で待機することになった。

（次号に続く）

平成２４年7月号 秩父１１６号

渡満記（雄基奉天組）②
最後の決死敢闘演習

吉原　瑞穂　予科7-7
（東京広尾）　航空１１－２

目次

１．分科決定の頃（秩父 115 号掲載）
２．渡満の旅　　（秩父 115 号掲載）
　―修武台から舞鶴での触雷まで―
３．再度渡満の旅
　―海防艦で日本海を渡る―
４．山間の夜行軍
　―雄基から会寧まで―
５．貨物列車の旅
　―会寧から奉天へそして帰国―

３．再度渡満の旅
―海防艦で日本海を渡る―

長田野廠舎では、それから１８年後、陸上自衛隊第７普通科連隊（旧歩兵２０連隊）中隊長としてそこでの錬武の機会を持つことになろうとは、当時は予知出来るはずもなく、約１週間をこの上もなくのんびり過ごした。明治時代のものかと思われるような毛のすっかり擦り切れた“赤毛布”も真夏とあってはさしたる不都合も感ぜず板敷きに直に寝るのも“落葉の寝床”よりは湿気がないだけむしろ快適に感じられた。筆者にとって楽しかったのは偶然に拾ったピアノ線で作った“釣り針”を農家から貰い受けた馬の尻尾の“みちいと”につけ、近くの藪から切り出した竹を釣り竿にして廠舎の下を流れる川に釣りに出掛けることであった。獲物を持って帰ってもどうしょうもないので釣り上げる楽しみだけに釣り糸を垂れる“枯れた釣”であった。偶然に授かったささやかな楽しみは触雷による船の沈没、第２陣に対する艦載機の攻撃の惨劇を少しは忘れさせてくれた。

こうしているうちに船の手配が整い、再び舞鶴港へ前進した。岸壁には数百トンの小さな船が待っていた。再編第2梯団の我々を乗せて単独で日本海を横断する艦だ。１万数千屯もあった前の船を見ている者にとっては、まことに小さく頼り甲斐のないものに見える。“海防艦屋代”といい主として潜水艦を攻撃する艦だという。３００人を越える士官候補生が入る船室を準備する余裕がない。吹き曝し照りっぱなしの甲板が対岸に着くまでの“居住区”である。それでなくとも狭い甲板に“爆雷”がぎっしりと積まれ、船倉まで“爆雷”で“士官候補生”を挟んだ“候補生入りバクライサンド”である。

日本海は既に戦闘海域になっている。当然実戦を覚悟しての単独航行である。本艦の戦闘行動（爆雷投下が主）の邪魔にならないように適当な位置を占めて座る。海中に転落しないように、荷造り用の細紐を腰に巻き付け、残った部分を船の手すり等適宜の物に結び付けた。余りの大漁に船倉が

一杯になったマグロ漁船が、甲板まで獲物を積んだような格好である。便所は乗組員用では足りないので、デッキから外（即ち海の上）に厚い板を突き出して海中に投下するにしつらえられている。この即席トイレでは思わぬスリルを味わうことになった。外洋に出てからの日本海のうねりは思いの外高く、小さな船の赤い腹が見えるほどのうねりが続き、“用足し”の度に細引きで手すりに結わえ付けてしゃがんだ体が天に届くかと思うほどに揺すぶり上げられ、次は千刃の谷に突き落とされ体内から絞り出された小さな塊は或るものはしゃがんだ尻を洗うほどの高い波頭に砕け、或ものは余りにも長い落下時間に耐えられず途中で分解するといった有様だった。

海防艦屋代

再編第２梯団の足跡

８月６日“帽子振レ！”も疎らな海軍さん達に見送られて岸壁を離れた。残存機雷も気にしないような確かな足取りで湾口まで一挙に走った。先の船がこの前のままの姿で波に洗われている。“イッテクルヨ！”声にならない声を掛けて通り過ぎる。

湾の外に出ると直ぐ“之の字”の航行が始まった。同時に“対潜水艦攻撃訓練”が始まった。船足を１５ノットに上げて爆雷を爆雷投下器に装着して発射直前の状態までもっていく訓練である。若い士官の指導を受けているのはいずれも年配の水兵で汗びっしょりになりながらの頑張りにも拘わらず所望の時間内には出来ない。“かかれ”から“発射準備完了”まで１０秒以内が要求されているようだが、何度やっても２０秒以上かかっている。所定の訓練時間が過ぎ“煙草盆出せ”になったところで水兵さんに話しかける。皆が召集兵だとのこと、教官役の下士官も海防艦は初めてだという。“日本海はアメリカの潜水艦が入り込んでおり、一般の船だけでなく、艦船も次々にやられている。しかし、本艦は潜水艦が怖がる海防艦です。油断さえしなければ大丈夫ですから安心して下さい”とこちらの懸念を見透したようなことを言う。そう言われれば潜水艦から攻撃を受ければ逃げる以外の防御法を持たない客貨船よりも体は小さくとも潜水艦が怖がる海防艦のほうが力強くなってくる。海の上ではどっちみち彼らに任せるしかない。

訓練以外の時間は８ノット位の経済速度で走ったり、しばしば１０ノット、１５ノットと速度を変える。速度を変えることと“之の字”航行が潜水艦の攻撃をかわす基本的な方法という。

昼は容赦なく照りつける８月の太陽とそれを遮る物もないままに照りつけられた甲板の熱気に包まれる。さながら天然のオーブンの中で照り焼きにあっているようなものである。

飲み水も本来の乗務員分しか積んでいない。設備がないから極端な節水が要求される。潤沢に水を使い慣れている“陸サン”にはこたえる。割り当て分は歯磨き、うが

い用に使えば顔を洗う分はない（海軍サンはそれだけで充分だ）。乗艦する時水筒に入れた水が貴重である。筆者の特大の孟宗竹水筒が役に立った。小振りで品の良いのや細身で軽いのを持った連中への補給用にもなった。夜は海上特有の冷気に曝され屡々襲う波飛沫は細引きで結わえ付けた体では避けようもない。爆雷だらけの狭い甲板では運動も出来ない。乗務員の爆雷投下訓練だけが艦上でのたった一つの躍動である。

雲と水平線以外に見える物はない。船酔いに苦しむ者に手当ての方法もない。単調な航海も航海長の“朝鮮の山が見える”という説明でようやく終わりに近づいたようだ。３日目の午後である。言われてみれば水平線が微かに乱れて見える。だが、海の旅は見えてからが遠い。走れども走れども近寄ってこない朝鮮の山並みをいつしか雲かとも疑い、相変わらずのろい足取りで“之の字”航行を続ける海防艦に拍車でもかけたい気持ちになる。　艦長がデッキに降りてきて“狐は川を渡り終えるときよく尻尾を濡らす”と冗談混じりに逸る我々を慰めてまた、艦橋に上がっていった。海岸線が見えるようになった時は陽はすでに山の端に懸かっていた。大きな港に近づいて行く。細引きを解き放して舷側に群がる。船酔いでぐったりなっていた者も体を起こして来た。海上での“決死敢闘演習”ももうすぐ“状況終り”である。影山（佐藤）玉明⑪が福島弁で皆を笑わせる。しかし、その悦びは間もなく無惨に打ち砕かれた。港の入口近くまで近寄っていた船は急旋回して急速度で引き返し始めた。“港内に機雷が投下され、掃海が終わっていないため入港できない”との説明である。仕方なく海岸を左に見ながら１５ノットの第一戦速で北上する。また、港が見えてきた。しかし、ここも入港できない。また北上する。次の港も入港できない。何回か訪問販売の外商員が次々に門前払いを食ったような目に会いながら北上を続ける。いつしか船の甲板は真夏というのに薄ら寒くなってきた。余程北に上がったらしい。

８月８日、禿げ山に抱かれた小さな港がやっと我々を迎え入れてくれた。朝鮮最北の港“雄基”である。陽は山の端に入って久しいが北国の宵は明るい。緩慢な歩みで石炭を運ぶ“苦力”（満州育ちの玉田の説明）、錆だらけの船に木材を積み込むウインチの甲高い叫び、破れたままの倉庫、低い屋根の町並み、うらさびしい港である。

丘の中腹にある煉瓦作り２階建ての公立小学校に徒歩で到着、教室に泊まることとなった。我々を運んだ海防艦の背中が目の下に見える。鉄道が裏山の中腹を鉢巻き状に巻いている。峠の向こうはソ連だ。ここは国境の港町である。（次号に続く）

平成２４年１０月号 秩父１１７号

渡満記（雄基奉天組）③
最後の決死敢闘演習

吉原　瑞穂　予科７-７
（東京広尾）　航空１１－２

目次

１．分科決定の頃（秩父 115 号掲載）
２．渡満の旅　　（秩父 115 号掲載）
―修武台から舞鶴での触雷まで―
３．再度渡満の旅（秩父 116 号掲載）
―海防艦で日本海を渡る―
４．山間の夜行軍
―雄基から会寧まで―
５．貨物列車の旅
―会寧から奉天へそして帰国―

4. 山間の夜行軍

—雄基から会寧まで—

夕食は船で済ませていた。日本海における3日間にわたる“決死敢闘演習”の疲れを癒そうと早々に校舎の板の間に横になる。板の間の直か寝ながら久振りの広々とした“動かない寝床”が有り難い、五体を伸ばすだけ伸ばし前後も覚えず眠り込んだ。だが、北国の夏の夜は短い。5時が過ぎたばかりに目が覚めた。今日はいよいよ満州入りだ。すぐに起き出して朝の用を済ましてしまう。町はまだ眠っている。岸壁に係留していた海防艇はいない。昨夕積み荷をしていた石炭船も木材船もいない。湾内に動くものはなく港はガランとしている。“ブーン、ブーン！”聞き慣れない爆音が聞こえてきた。くぐもった音が金属的な米軍機の爆音を聞きなれた耳に異様に聞こえる。もちろん友軍機でもない。確かめるため校庭に出ると裏山の向こうからのようだ。“早朝から訓練をやっているのか、それにしても随分国境に接近してやるものだナア！”なお、接近して来る爆音に“モシカシタラ？”と黒い予想が頭を過ぎる。稜線の見える所まで走る。爆音の主が現れた。低翼単葉の小型機（海軍の９７式艦上攻撃機級）が１機２機そして３機と裏山の肩をなめるような低空で、ゆっくりと降りて来る。胴体のマークは“赤い星”間違いなくソ連機である。岸壁に向かい急降下していった。やがて黒煙が上がり始めた。誰かが“退避！”と叫んだ。急いで教室に帰り窓から敵機の攻撃を見下ろす。ゆっくり飛び交う敵機の動きは機敏なグラマンのそれを見慣れた目には憎らしいほど落ち着いて見える。敵機はのどかな港町の上空での遊覧飛行でも楽しむかのように傍若無人に飛ぶ。攻撃の合い間を利用して裏山の森林の中に退避した。港と町が一望に見える。黒煙を上げる石炭の山、南に退避して行く住民の群れ、眠っていた町が戦場になった。遂にソ連とも戦争が始まった。情勢に劇的な変化が起きたらしい。“６０期は決戦に間に合わないかもしれない”某先輩の言葉が改めて思い起される。それを聞いた時には理解することが出来なかった“恐ろしい意味”を今は正しく捉えようとし、その裏からそれを避けようとする。結論の出せない思考からは“焦り”と“恐れ”ともつかないものが生まれてくる。押し黙ったまま見下ろした町は被害こそ少ないようだが敵機の攻撃に息を殺している。

“ピシッ！”何かが肩を叩いた。左の肩甲骨の下が痛い。上衣を脱いで千歳に見てもらう。ナイフの先ぐらいの金属片を取り出してくれた。これは皮膚を少しばかり破っただけと思っていたが、復員後化膿して２か月近く呻吟することとなった。

８月９日午後遅くなって、“可及的速やかに当地を出発、徒歩行軍によって会寧（当地から約１００ｋｍ西）に向かう”こととなった。町の裏山を登ってから蛇行して西に向かう鉄道は国境の近くを通るので危険で使えなくなった。着のみ着のままの我々にとっては準備は5分もかからない。

千歳と２人は、輸送指揮官に呼ばれ、“２人は路上斥候となり、本隊の前方５００ｍを先行せよ。”と命ぜられる。

朝鮮ー満州交通図

併せて、“町を出たら暫く北上し、途中から左折して西に向かう。左折地点は国境に最も近接（数ｋｍ？）する。出来るだけ早くこの地点を通過する。爾後は山間の一本道だ。間違うことはない。”旨の指示を貰って千歳と２人で校門を後にした。人通りの絶えた通りを両側に分かれ、示された道を急ぐ。薄明りがあるうちに街を北に抜け出た。一車線半ぐらいの砂利道がなだらかな台地に開かれた耕作地を二つに分かれて北上する。道の右側には背丈位の灌木に覆われた小川が音を立てて南下している。雲が多かったのか暗くなるのが早かった。気忙しく左折点までの道を急ぐ。

前方の藪がザワザワと葉擦れている。少なくとも数名の者が潜んでいる？“マッチョレ！（待っておれ）”千歳に合図し軍刀を背中から降ろして音のした背後に回る。再び“ガサガサ！”と無防備な音をたてていたのは藪から出てくる野放しの朝鮮牛だった。“幽霊の正体見たり枯れ尾花”千歳にひやかされながら先を急ぐ。“ザッザッ、ザッザッ”今度は後方から集団の足音が聞こえてきた。本隊にしては様子が違う。駆け足で近付いたのは全員が濃い緑色（夜間でそう見えた）の制服を着用し、右腕に“日の丸”の腕章を付けた数百名（５００名は下らない）の青年部隊であった。戦後、“多くの朝鮮青年がソ連の参戦とともに集団でソ連軍に合流しやがては北朝鮮軍の有力なメンバーになった”との話を聞いたが、この時の連中がその一部であったのだろうか？道を聞いた我々２人の間を整然と追い越して行った。宵闇の奥は正しくソ連領土のはずである。

三叉路に出た。左折点である。千歳に“座ッチョレ！（座っておれ）”と藪の中に入れて休ませる。自分はそのまま暫く北上を続ける。やがて道は右に折れて小川が左側に移った。川の上流に山の端が連なるのが微かに見える。間違いなく先ほどの地点で左折だ。急ぎ引返し千歳と合流する。手間をとった割には本隊の足音も聞こえない。しかし、迷いなく左に道をとる。国境に最も近接した地点を後にした。安心したのか道端への気配りも効くようになり、まだ黄色い花をつけた南瓜を見つけた。一つずつもぎ取って皮ごとかじる。まだ幼い南瓜は水ッポイだけであるが早めに食べた夕食の不足を補ってくれた。僅かに其処と判る路面を見失わないように羊腸の道を拾う。休憩も取らずひたすら前進する。鋲を打った靴音だけが夜半の静寂を破る。

道路を少し逸れた山陰に小さな明かりが見えた。瞬くような灯りが急に“道を確認してみようと”と弱気を誘う。千歳に“このまま前進してくれ、道を聞いてくる。５分しても追及しなかったならば、来てくれ”と言い残して“灯の家”に近づいた。軒は低く屋根には草が生えた質素な家である。煙突から微かに煙が立っている。まだ起きているらしい。“コンバンワ”と声を掛ける。暫くして離れた戸口が開いて、老人が一人で出てきた。手に棍棒を持ち犬でも追うような仕種をしながら、何かわめき始めた。敵意をもった様子に困惑しているとまた一人、今度は若い人が出て来た。老人に何か言っている。当方を認めると“兵隊さんですか？”そうだと答えると“お祖父さんは大変気が立っています。早く行ってください”と言う。夜分の失礼を詫びると“そうではない。貴方が日本人だからです”と青年までがとがった口調になった。長居は無用と、向けた背中にまだ続く老人のわめき声を聞きながら元の道に戻った。“この辺りは命に危険がないものの決して平安な地ではない”ことを２人で語りながらまた歩く。

歩けども歩けども同じような折れ曲り上り下りする道が、歩けども歩けども現れる

似たような山また山の間を縫うように続く。一つ越えればまた次の峠が現われ、一つ曲がればまた次の曲りが現れる。喋ることすら忘れてひたすら歩き続ける。夜が明けて暫くして少しばかり開けた谷間に閑散とした村落が見えてきた。昨夜のこともあり、２人の距離を開き道端の楊柳で身を遮蔽しながら躍進する。部落の近くに下士官が立ってこちらを見ている。なお、近付いて行くと“候補生か？”“そうだ”“御苦労！後の者は？”“すぐ来るはずだ”と答えると、“此処で大休止だ”と部落の外れの林へ誘導してくれた。我々よりも先発した隊があったらしく、林の中では相当数の候補生が正体もなく寝込んでいた。かくいう２人も背負い袋を枕にして横になるなり寝込んでいた。

陽の高さから正午はとっくに過ぎた頃目を覚ました。空腹と徹夜の行軍に疲れた体では何の行動もしたくない。ぼんやりとそのまま寝転んでいると、何時の間に着いたのか本隊にいた大峰が握り飯数個を持ってきてくれた。とりたてた味もなく、おかずとてない握り飯だけを２人でムサボリ食べてまた眠った。

ようやく陽が陰り始めた頃目が覚めた。皆今夜の行軍に備えて腹ごしらえをしている。今はその名は定かではないが鹿爺洞と記憶するこの山間の部落には日本人は小学校の校長先生と新潟県から嫁入りして来た中年の婦人との２人だけしか居ないという。昨夜歩きながら生で齧った残りの米を現地の婦人に頼んで炊いてもらう。婦人が作ってくれた幾つかの小さな握り飯を庭先の草の葉に包んでもらって集合点に帰る。

体力が行軍に耐えない一部の者はトラックで先発した。再び夜間の行軍が始まった。会寧への最後の区間である。トラックに収容するほどはなかった軽症の患者十数名は修武台一宇隊時代の第五寝室の戦友を主力にした十数名で護送しながら本隊の後方を前進することとなった。筆者も千歳も護送班の一員である。患者の殆どが下痢患者である。品川を出発して以来の不順な生活、特に灼熱の甲板での海上移動によって体力が消耗していたところに煎った大豆を食べながら現地の生水を飲んだらしい。本隊とは出発してすぐから遅れ始めた。しかも弱った体での同行は無理である。無理に本隊に追及するのをやめて５０分歩いたら１０分の休憩をとることになった。時間が来れば指示なく道路に崩れるように寝てしまい、時間が来れば“出発”の号令で歩き出す。道は昨夜と同様に重畳する山を縫って曲折する上り下りの多い砂利道である。下痢患者の集団だから“用足し”は頻繁である。用足しが必要になった者を道路から外れた場所まで連れて行き、済んだらまた追及する。途中で別の患者が用足しをしていたら、付いている者から氏名を確認しておく。行軍長径は伸びるばかりである。落伍者が出始めた。兎に角見失ったら大変である。全員が無事会寧に到着しなければならない。森繁弘㉓、松本精二⑤、大峰（椎原）道夫㉔、阿部　等大きな連中が肩を貸し腕を抱えてやる。整列の時は再左端（翼）の千歳や筆者は彼らの背負い袋や軍刀を持って追及する。道端に座り込んで“もうダメダ！殺してクレ！”と動かなくなる者が出る。“何をイウカッ、一緒に行くんだッ！”心を鬼にして顔をひっぱたいて気合を入れ、２人掛で引き摺るようにして前進する。修武台で同じ寝台で生活した“護送班員”のチームワークは見事であった。行軍長径はますます伸びてしまうが前後の連絡は完全である。患者の用足しを助けながら落伍しそうな者を担ぎながら５０分歩いて１０分休む行軍が徹夜で続いた。

８月１１日の明け方になって会寧の町を

望む所に着いた。２夜にわたる夜行軍で約１００ｋｍを踏破したのだ。一人の事故もない。我々護送班には上級者は一人もいなかった。同期生だけの戦友愛による助け合いと励まし合いの士官候補生らしい衿持と元気に溢れ、幾度かの決死敢闘演習で鍛えた指揮能力と行動力を存分に発揮した“自律の行軍”であった。“薄暮になってから会寧に入る”との指示で、道路傍で大休止となった。それは痩せた楊柳では遮ぎりようもない８月半ばの日差しの下で給食も給水もなく近くを流れる小川の水で福知山を出て以来の汚れを落とした後は背負い袋を枕にして只眠るだけのものだった。

（次号に続く）

平成２５年１月号 秩父１１８号

渡満記（雄基奉天組）④

最後の決死敢闘演習

吉原　瑞穂　予科７-７
（東京広尾）　航空１１－２

目次

１．分科決定の頃（秩父 115 号掲載）
２．渡満の旅　　（秩父 115 号掲載）
　―修武台から舞鶴での触雷まで―
３．再度渡満の旅（秩父 116 号掲載）
　―海防艦で日本海を渡る―
４．山間の夜行軍―雄基から会寧まで―
　（秩父 117 号掲載）
５．貨物列車の旅
　―会寧から奉天へそして帰国―

§貨物列車の旅
―会寧から奉天へ　そして帰国―

楊柳が作る陽陰は陽の動きにつれて移る。照りつける日差しに目を覚ましては、新しい陽陰に移って眠る。兎に角、眠る以外にすることがない。１１日の明け方に着いてから夕暮れまでただ眠りに眠った。会寧の駅に入ったのは暗くなってからだった。此処で支給された沢庵と梅干し入りの白米のお握りは久方振りの御馳走だった。

腹ごしらえを終った我々を迎えに来たのは一連の貨物列車であった。一輌に約７０名ずつが乗り込んだ。馬小屋と同じように藁を敷いたばかりの貨車でも飲まず食わずの徹夜の行軍に比べれば“天国”であった。乗り込むとすぐ横になった。内地よりも広い軌道を使っているので、貨車の中は広く頭を壁際にして足を中央に伸ばしても反対側に寝た者の足には届かない。発車も知らず寝入ってしまった。

目が覚めると列車は“左に海を見ながら”走っていた。ということは列車は朝鮮半島を南下していることになる。会寧から牡丹江に向かうと聞いていたがこれでは方向が違う。“このまま内地に帰るんだ！”“いや満州に行くんだ”状況が分からないままひとしきり議論が弾んだ。結局、自分達の希望に合わせて、結論 - 満洲 - に落ち着いた。

貨車内でも下痢患者が出ていた。当然用足しが頻繁である。徒歩行軍中ならば随所随所で出来るが、走る列車、しかも、何時停車し何時発車するか分からない臨時の貨物列車では貨車から降りてゆっくり用足しするわけにはいかない。一方、下痢患者特有の要求は列車の運行には関わりなく起こってくる。遂に用足しの最中に不意に列車が発車し、患者は尻を丸出しのまま貨車に引き上げてもらい、自分は後続貨車の連結環の部分に、次の停車駅（必ずしも駅でなかったが）まで乗る羽目に陥った。

貨物列車は半島を横断して西に向かい始めた。海岸から丘陵地帯への坂をあえぎな

がら登って行く。聞いたとおりの禿山が続く。窪地で白鷺にしては大きい鳥（鸛の鳥？）が列車の轟音に脅えることもなく餌を拾っている。農夫が赤い牛の背に粗朶を結わえている。雄基の混乱は此処にはまだ波及していないようだ。

貨車の扉を開け離し藁敷きにあぐらをかいて平穏な風景を眺めながら西に下る。８月１５日、列車は平壌を過ぎて北上を始めた。新義州を出たら鴨緑江を渡る。山々が夕闇に隠れた頃遼東半島に入った。歴史に名を連ねた山や川を過ぎて“鶏冠山”に着いた。ホームの反対側には無蓋貨車の列車が停まっている。ホームを横切って近付いてみる。“兵隊サン　ソ連軍は新京の近くまで来たんダヨ　アンタタチ　何も持たずに何しに行くんですか”。貨車の中に素手で乗り込んで北上する我々を見れば当然の疑問であろう。

別の貨車では一人の婦人が今し方死んだという娘さんを抱いて泣いている。ソ連軍の侵攻と同時に着のみ着のままで避難して来たものの“雨に打たれながら、吹き曝しの無蓋貨車での移動でしたから子供には無理で肺炎にかかったのでしょう”と隣の婦人が説明する。同じ貨車の中では朝方にも一人亡くなり、途中の駅に埋めてきたという。

“北上する列車は貴方達だけです。カタキをとって下さい”は訴えとも励ましにもとれる。食べ物をねだる子供に米粒一つ持たない我が身ではどうすることも出来ない。

さしたる荷物もなく、うづくまったり、もたれたり、疲労し切った人々を乗せた無蓋貨車の列は長かった。列車が去った線路の向こう側に所構わず行われた用足しの跡には、かつてアジアの指導民族と自負していた（当時はそう教えられていた）民族の誇りはすでに無かった。

例になく長時間の停車は南下する列車との交換、離合のためらしい。ホームの向こう側を一連また一連、無蓋貨車の列が南下して行った。重苦しい光景から“やはり我々は間に合わないのでは？”歴史に名高いこの鶏冠山に立って、先人の偉業を偲ぶ一方で、それがすでに、虚しいことになりつつあるのでは？と、暗い予感がまた頭をもたげる。列車は北上を始めた。

資料で馴染みの幾つかの駅を或いは素通りし、或い停車しながら不規則な運行をしながら、遼東半島を北に抜けて行った。８月１６日の夜が明け始める頃、平野部に出た。貨車の外に顔を出していた玉岡俊雄⑤が“奉天は近い”と、皆を喜ばせる。奉天（瀋陽）育ちの彼にとっては忘れられない山河である。久し振りの里帰りに大きな目が一層大きくなっている。幾ら走ったのか列車は駅でもないのに停車した。我々の貨車は道路を閉塞して停まった。それからは列車はコトリとも動かなくなった。陽が昇り正午を過ぎても動かなかった。状況が判らないので貨車から離れることも出来ず、給食、給水も無いまま陽が傾きその影が長くなっても動かない貨車の中で過ごした。陽が沈み風が涼しくなった頃、２人連れの若い女性が列車に近づいて来た。玉岡が“姑娘（クーニャン）”だと教える。散歩に出てきたのだろうか。我々の貨車が道路を閉塞しているから通り抜けることが出来ない。スリット（勿論当時はこんな言葉は知らない）の深いお揃いのライトブルーの中国服（後年旗袍（チイパイ）と呼ぶことを知る）を着て、肩に掛る髪を風に任せてこちらを見上げている。“女性に会ったら反対側を向け”と教え込まれ、努めて見ないようにしても、やはり目に入った日本の女性のひっつめ髪にモンペの身なりに比べるとなんとも優雅なものである。

無蓋貨車に死んだ子供を抱きうちひしがれ疲れ切って南下して行った同胞婦人の惨

状と、夕風に散歩を楽しむ中国婦人の環境との余りにも大きな格差に情勢の並々ならぬ変化をかぎとったものである。

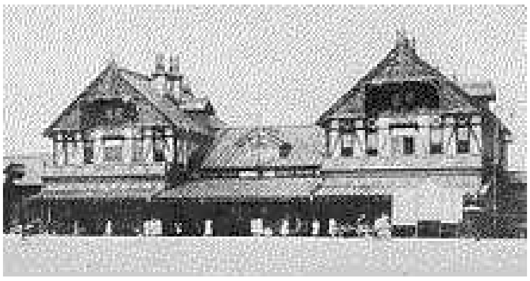
蘇家屯と呼ばれる駅の手前に朝も早いうちに着いた列車は暗くなってからやっと動き出した。貨物列車特有の乱暴な運転でも北上していると頭から信じながら、今はもう、空腹をとおりこした体を明かりも無い貨車の藁敷きの中に横たえた。

“吉原ッ！起キロッ！”鶏冠山ダッ！”激しく揺り起こす千歳の声に、“バカナ”と言いながら貨車から出てみる。ホームにでれば正しく鶏冠山である。眠っているうちに列車は南下したのだ。

“ドウイウコトダ”“ワカラン！”、晋も同じことしか言わない。何時もは楽観屋の大峰まで黙り込んでいる。

“やっぱり間に合わなかったのだ！”“間に合わない”今、この言葉の本当の意味が事実を伴なって来た。体から力が抜けて行く。貨車に帰りタオルを顔に覆せて涙を隠す。何時走り出したのか、眠るともなく覚めているともなく何時間かが過ぎて行った。朝鮮に入って駅の手前に停まった列車に石を投げつける群衆（貨車の扉を閉める以外にそれを防ぐ方法はなかった）、手に手に小旗を持ち、鐘太鼓を打ち鳴らしながら独立を祝っている大群衆の姿に“何かが終わった”ことを感じ取りながら南下した。

列車は京城のホームに滑り込んだ。昭和２０年８月１７日の昼だった。ホームには憲兵伍長が“日本は負けた”と告げる途端に“何を言うか！”候補生数人が飛び掛った。疲れ切った体の何処に潜んでいたのか、猛烈な突進だった。将校が一人飛んで来て中に割って入り、“天皇陛下が戦争をやめることとされたのだ、これが勅語だ”と、刷り物を配った。号外に刷られた“詔勅”を貨車に持ち帰って読んでみるが、馴染みのない言葉が多くて意味が判らないところがある。２，３人が固まって何回も読み返す。誰かが声を上げて泣き出した。幾人かが続いて泣き出した。“日本は負けたンダ！”２日前、蘇家屯の手前で停まっていた時、戦争は終わっていたのだった。



龍山駅（当時は京城駅より立派であった）

放心状態の我々を乗せた貨物列車は龍山の駅に着いた。此処で下車し、市内の公立女学校に宿舎をとることとなった。此処で朝鮮軍から新しい夏服と下着類及び乾パン、砂糖等若干の食料品が支給された。久し振りに食器に盛った食事をとった。汁粉に舌鼓を打ち、デザートのリンゴは格別であった。

“国体はどうなるのか？”“軍隊はどうなるのか？”“我々は武装解除されるのか？”等々、情勢に疎かった我々には解決しようにも解決できない難問に慌ただしく時間だけが過ぎて行った。

８月１９日、我々を乗せた列車は龍山より釜山港に向けて出発した。途中の駅々では昨日にも増して“大韓民国独立”と大書した旗を立て、手に手に旗（現在の韓国国旗）を打ち振る喜びの絶頂にある大群衆があった。擦れ違う列車（彼らは客車、我々は貨車）には着飾った男女が超満員で乗り込んでいた。

８月２１日釜山駅に着くと船舶司令部の将校が“候補生は急げ！”と、急き立てるようにして船室に誘導した。割り当てられた船室に、まだ着かないうちに出帆した。割り当てられた船室は機関室の真上にあっ

て暑くて堪らないので早々と甲板に逃げ出した。此処は息も微かになった赤ん坊を抱いて泣いている婦人、放心したようにデッキに座り込んでいる乗馬服の婦人、顔を丸坊主にした婦人等、無残な同胞の群れで足の踏み場もない。若い婦人が生米を噛み砕いて口移しに子供に飲ませている。弱り切った子供は自力で食べられなくなっているという。それにても生米では却って悪かろうと船室に帰り乾パン一袋と途中で買ったりんごを持ってきてあげた。喜んだ婦人の腕の中の子供はその夜死んだ。夕方あげた乾パンを袋のまま胸に抱かせ、まだ生きているようにあやしていた。

門司港も下関港も米軍が投下した機雷のため入港できない。夜も遅くなってから山口県の須佐という小さな漁港の沖合に投錨した。土地の人々かが伝馬船を狩り集めて砂浜まで運んでくれた。昨夜死んだ子供を相変わらず生きているようにあやしながら抱いて下船した婦人の背中には何一つの荷物もなかった。

我々も順に従って上陸し山陰線須佐駅の屋根もないホームで夜を明かした。８月２２日、迎えに来た無蓋貨車で山陰線次いで福知山線を経由、大阪から東海道線に入った。蒸気機関車に引かれて約２０時間の無蓋貨車の旅であった。幾つものトンネルを通りぬけた顔は切羽から出て来たばかりの炭鉱夫そっくりになり、折角貰った新品の夏服も煤で真っ黒に汚れてしまった。最後の丹那トンネルは容赦なく襲いかかる煙に、“もうダメダ！”と苦しみながらやっと通り抜けた。

修武台に帰りついたのは満洲に向けて出発してから丁度一か月振りの８月２４日であった。菊池区隊長が舎前で待っていた。秩父山中から通算して４０日間に及ぶ“決死敢闘演習”が終わった。

それは航空士官学校“最後の士官候補生”による“最後の決死敢闘演習”であった。復員式の式場で“修武台の碑”を撤去する槌の音が聞こえてきた。

別れの夜には菊池区隊長が

明日はお発ちかお名残惜しや
大和男の子の晴れの旅
朝日を浴びて出て立つ君を
拝む心で送りたや

と歌ってくれた。泣きながらそれを聞いた。

おわりに：ソ連軍の奇襲侵攻という急迫した状況の下、輸送指揮官はじめ区隊長方の適宜適切な状況判断と、的確な措置、それに応えた候補生の矜持と戦友愛に裏打ちされた自律の行動によって、ソ連軍との遭遇を不知不識のうちに躱して、４００名の候補生が一人の欠落もなく、修武台に帰還した。まさしく「帝国陸軍最後の候補生」による「最後の決死敢闘演習」であった。（完）